

説教
「再びこの道へ」
復活ルーテル教会日本語ミニストリー28周年記念
2016年11月6日

教区長 アンディ テイラー

復活ルーテルの日本語ミニストリーの28周年記念、おめでとうございます。この特別な日に、招かれ、皆さんといっしょにいること、そして説教することを誇りに思います。そして、みなさんの安達均牧師の働きに感謝しています。彼はパシフィカ教区で、とても価値のあるスタッフなのです。教区ですばらしい仕事をしており、またみなさんのことを、とても大切に思っており、また皆さんの働きに誇りを持っています。パシフィカ教区、100以上の教会を代表して、みなさんにご挨拶を申し上げるとともに、神が、皆さんの間に在って、また皆さんを通して今後も何年にもおよぶ記念日を積み重ねられるように導いてくださることを祈ります。

さてみなさん、旅行をしていて、全く予定していなかった所についてしまったことはありますか？ 私が仕えていたセントアンドリュールルーテル教会では、2007年夏に、私に研究休暇を与えることを決議しました。そこで、3ヶ月の学びのための休暇をとったのです。目的は、何かほかの言語を学ぶということでした。日本語は選択しませんでした。もし、今日ここで説教することがわかっていたら、それもありえたかもしれません。結局スペイン語を選びました。スペイン語を学ぶには、自分をスペイン語漬けにしようと思い、中米のコスタリカの一家族といっしに住むことにしたのです。土曜の午後に、セントアンドリュールの皆さんに別れを告げ、飛行機に乗り込み、ダラスへと、そして飛行機を乗り換えてダラスを飛びたち、午後8時の到着予定でした。しかし、落

雷をともなった嵐のために、着陸はできません。3時間も飛び回った後、ニカラグアのマナグアに着陸し、給油することになりました。再び飛び立った時には、嵐はおさまり、コスタリカに着陸できると聞き、喜んだのです。そして到着間際と思った時でした。パイロットが、夜になったので飛行場は閉鎖してしまったと言われた、とアナウンスをするのです。やはり今回も着陸できずに、別の場所に着陸しなければなりませんでした。

そしてみなさん、どこにいったと思いますか？ フロリダのマイアミです。日曜朝5時に、わたしたちは、マイアミに到着したのです。そして、新しい飛行機の予約をしなければならぬといわれたのです。何人かは月曜午後まで飛び立つことはできなかったのです。乗客たちは、怒りに怒りました。現地でのツアーのために高いお金を払ったのに、台無しとなったり、ある人々は二日間だけの休暇だったために、休暇は消え去りました。日曜の朝にこんなに怒った人々を見たことはありませんでした。何年も教会の牧師をしてきているので、日曜の朝に、何回も怒っている人を見たことはありましたが、これほどまでに怒った人々の集団を見たことはありませんでした。それゆえ、ひとりの乗客のことが、この上なく浮き彫りになりました。彼女はマイアミに立ち寄っていることを喜んでいるようなのです。彼女に、「この状況を喜んでいるようだね」と話しかけると、「夢のなかにいるみたい。私はずっとマイアミを訪ねてみたいと思っていたのよ。そして、いま、ここにいるのよ。そして月曜午後までここにいられるのよ。」と言うのです。「マイアミの街を観光して、昼寝をして、夜は楽しんで、そして月曜午後にはコスタリカに行けるのよ。ここにまさか来れると思っていなかったから、これはすばらしいことなのよ。」そこに私が尊敬できる女性がいました。まったく文句を言わず、しかし、この遠回りの

旅を、新しく珍しい経験の機会ととらえ、「まさかここにこれと思わなかった。」と言うのです。

エマオへ向かっていた弟子たちは、まさか、こんなことになるとは思っていませんでした。彼等はイエスの生存中の宣教の旅に従って行きました。イエスが、病の人を癒し、空腹にある人を食べさせ、死にある人を蘇らせる事さえしたのです。弟子たちは、イエスこそ、神の約束した救い主だと確信し、この世に神の御国をもたらしてくれると信じたのです。一週間前には、イエスがエルサレムに王として迎えられたのを目撃したばかりでした。そして彼等の夢が現実になる時だと思ったのです。しかし、その夢は悪夢と変わっていったのです。人々に賞賛されるどころか、イエスはののしられ、つばをかけられたと、弟子たちは聞いたのです。権威の象徴である王の冠をかぶるどころか、いばらの冠をかぶらされたと、聞いたのです。王として持ち上げられるのではなく、十字架に架けられ、完全に一人きりで、みじめな屈辱的な死を遂げたと、聞いたのです。もし弟子たちの一人が女性だったら、確かなことはわかりませんが、彼女はこれらのことを本当に見たかもしれません。しかし、クレオパは男性の弟子であり、すべての男性はイエスが逮捕され殺される時には、逃げて行ってしまったのです。彼等はイエスと共に三年間、道を歩んだのです。しかし、彼等が救い主だと考えたイエスが殺されてしまい、途方にくれて生まれ故郷に向かって、イエス無しに、彼等だけで歩むことになるなんて、考えもしなかったのです。

ユーニスはそのような状態になるなんて考えもしませんでした。1900年に生まれ、ほぼ30歳になっており、二人の子どもの母親になっていました。その時、大恐慌が襲ったのです。多くの人々が職を失いました。父親も職を無くしました。両親はユーニスと彼女の夫とともに住むようになりました。ユ

ユーニスの夫だけが家族の中で仕事を持ち続けたのです。もし、彼が働いていなかったら、家族はもっと前に、飢え死にしていたことでしょう。というのは、合衆国には当時、失業者保障、福祉、生活保護などというものはなかったのです。恐慌が襲った時、人々は飢え死んでいったのです。しかし、ユーニスと家族はだいじょうぶでした、1931年までは。。。ユーニスの夫は突然、心臓発作で亡くなったのです。ユーニスは夫の死を嘆くばかりではなく、彼女自身、そして家族がいったいどうなってしまうのか、途方にくれました。家族がこれからどうやって生きていけるのだろうか？ 彼女は どうやって子どもたちを、そして両親を養っていけるのか？ 彼女はおびえきっていました、彼女自身もどうなってしまうのか。

クレオパともう一人の弟子は、エマオへの道の途上で彼等がどうなってしまうのか考えていました。彼等は見知らぬ人に会いました。そして、その見知らぬ人は、いったい彼等が何を話しているのかと質問したのです。彼等は、イエスの死についてだけではなく、その日の朝に女性たちが話していた奇妙な話についても語ったのです。何人かのイエスの女性の従者たちは墓に行きましたが、墓の中は空で、遺体が無くなってしまっていた事を。彼女等はイエスに会う代わりに二人の天使に会い、天使達はイエスは死から復活したと話した事を。そして弟子たちにとっては、そんな話は不自然すぎてとても信じられず、彼等はたわごとだと思った事を。するとその見知らぬ人は、彼等を信仰の薄い者たちよと叱り、「なんと愚かで、心は鈍く、預言者たちが語っていたことを信じられない者たちなのか。」と言うのです。そして、イエスの死について聖書全体に前もって著されていたことを説明しました。

彼等が村に近づくと、見知らぬ人はそのまま先へ行こうとしました。しかし、弟子たちはお願いだからいっしょに泊まって欲しいと言いました。夕食時に、見知らぬ人が、パンをとり感謝して裂いた時でした。クレオパと、もう一人の弟子の目が開かれます。彼等は、見知らぬ人は他でもないイエスご自身であったことに気づきます。彼等は再びイエスとあの道をいっしょに歩いていたのに、イエスがパンを裂いてご自身を顕すまでは、イエスと歩いていたことに気づかなかったのです。

イエスが彼等に語った内容はどういう意味があったのでしょうか？ 私たちがいつも教え、説教をしている事なのです。神は、罪にとらわれてしまい、神が私たちの味方かどうかわからずに、私たちを大切に思っていてくれる神がいるのかどうか心配になってしまう人間たちであるとわかっていたのです。そして神は、この世にやって来て私たちの間に住み、神がいかに私たちを愛しているかを示すという行動を起こしたのです。イエスが十字架上で死なれた時以上に、神の愛がこんなにも大きなものであるかを示すものは無いということをつかせるための行動です。というのは、十字架上で、イエスは私たちの罪をとりさったのです。その罪とはこの世のすべてを神から、また神をこの世から切り離してしまうもので、私たちを死の力で覆ってしまうものです。私たちが神から、あるいは神を私たちから切り離してしまうものは、もう何も無いのです。イエスが死からよみがえったのは、聖霊の力を通して、わたしたちといっしょにいてくださるために、よみがえったのです。というのは、私たちには、この世に顕われてくださった神がいて、その神は、我々の歩む道に顕われてくださるのです。神が私たちといっしょにいてくださるという事は、時に、友人の言葉、牧師の言葉、あるいは慰めてくれる人の言葉を通して、わかるようになります。時に神は、見知らぬ人として、あるいは神秘的な形で、顕わ

れて、私たちが生きるのをいつも助けてくださるのです。そして復活という名前の教会に集う皆さんは、特にイエスが死から復活されたこと、そして私たちの生活の中に居てくださることを覚えているのです。しかし、神はどのようにして、私たちが神が顕われていることに気がつくのを助けてくれるのでしょうか？ 神は私たちが礼拝に参加するように、心が燃えてくるような御言葉を聴くように、そして聖餐式のパンとぶどう酒をいただくように、と招いてくださっています。神はこのような恵みの手段を通して、実にさまざまな方法で、私たちが神がこの世で働かれ生きておられることを、目撃し認識できるように、私たちの目と心を開いてくださるのです。そして、私は皆さんにお尋ねします、この一週間、皆さんの生活の中で、神はどこに顕われてくださったのでしょうか？ この礼拝の場に顕われたのでしょうか？ 職場や学校で、あるいは家庭に顕われたのでしょうか？ あるいはもっと他の場所とか、全く異なる形で顕われてくださったのでしょうか？ 私は神が我々一人一人に、毎日顕われてくださっていると確信しています。しばしば、神を認識できますが、認識できないこともあります。しかし、神は毎日私たちと共にいてくださり、神が良い時も悪い時も私たちを見守ってくださっているという信仰を持てるように助けてくださいます。

ユーニス悪い時を過ごしました。お葬式が終わるまで、冷静沈着を守りました。そして家に帰り、部屋に座りました。すると涙があふれ出てきて止まりませんでした。彼女は、彼の父親がやさしく肩をたたいてくれるのを感じました。妙に慰められ、愛撫されていると感じました。彼女は手をさしのべて、父の存在を確認しようとしたとき、彼女は、そこにはだれもいないことに気づきました。そして、彼女は「だいじょうぶだよ、みんなうまく行って、家族も生き延びることができるとことをわかるように、神が助けてくれていた。」と思ったのです。彼女はそう確信し、その晩は眠る事

ができ、翌日には職を探しに出かけました。最初に尋ねたところは、ある地方銀行でした。彼等は、ちょうど秘書の仕事の空きが出たと話してくれました。彼女は、申し込んで、採用され、いかに神が彼女と家族を心配してくださっているかに感謝しました。しかし一週間以内に、彼女は「肩をたたいてくれていたのは、本当に神だったのだろうか？それとも自分の空想にしか過ぎなかったのか」と思いはじめました。

ユーニス神の存在についてほとんど60年間、他の人と話すことはありませんでした。80歳代も後半になって、彼女は初めて彼女の牧師に打ち分けたのです。そして、牧師に質問しました、「あれは神だったのでしょうか？それとも私の空想に過ぎないのでしょうか？」エマオへの途上で躰われたイエスの話しを思い出して、牧師は返答しました。「私には、神のように思えるけど。」ユーニスは言いました、「もしそうなら、神について語る話を60年持ち続けていたのに、それを語る勇気を十分持ち得ませんでした。でも牧師さん、私の代わりに、どうかこの話を聴く必要がある人ならだれにでも、話してください。」

今日私は、皆さんにどうしてこの話をしているのでしょうか？ 私は皆さんに、ご自分の話について考えることを、お勧めしたいと思うからです。いつイエスがあなたと家族を祝福するために、あなたに躰われてくださったでしょうか？教会のどういうところに、神が働いておられることを見るでしょうか？この世に、家に、また、教会の中に、躰われてくださる神がいます。この神は、私たち人間を案じていることをわかるようにと、躰われてくださいます。この世で何が起ころうが、神は私たちと共にいてくださいます。そして、この世の命が終わろうが、神はずっといっしょにいてくださり、私たちを、未来へ運んでくださいます。それゆえ、私たちは自分たちのことを心配せずに生きることができます。

しかし、いかに神の働きを実行するか、神が私たちを愛し、大切にし、赦してくださるように、私たちも、いかに隣人を愛するか、いかに隣人を大切にするか、いかに隣人を赦すか、ということだけを考えながら生きていくのです。

日本語ミニストリーとして今言ったことを28年間してきているのです。互いに、周りの隣人と、また世の人々と、神の愛を分かち合ってきているのです。そして、神の助けがあって、みなさんは次の28年間も、さらにそれ以降も、神の愛を分かち合い続けるのです。

おめでとうございます。神がともに旅をしてくださり祝福してくださいますように。そして、神がみなさんを思いもしなかったような所に連れて来たなら、あるいはとても予測できなかったような道を歩むことになるなら、どうか覚えていてください、あなたはひとりではないことを。救い主キリストがいっしょにおられ、あなたを助け、導いていることを。そして救い主は引き続き、今日も、また将来に渡って、復活ルーテル教会を導いてくださいます。神に感謝して。アーメン。